

栗ヶ沢バプテスト教会 26-03-01 主日礼拝説教

「成長させてくださる神」Ⅰコリント3:1-7

木村一充牧師

この朝は、コリントの信徒への手紙一、3章から聖書の言葉に耳を傾けます。使徒パウロの時代のコリントはギリシャ最大の商業都市であり、貿易港を持つ町、また交通の要衝として栄えていた町でした。第2回伝道旅行でパウロは1年半にわたってこの町に滞在し、福音を宣べ伝えました。その後コリントを去ってエフェソに向かい、第3回伝道旅行の際にパウロは3年間、このエフェソにとどまりました。エフェソ滞在がパウロにとって異例の長さになったのは、3年のうちのある期間、ここで獄に入れられていたためではないかと思われまます。このエフェソ滞在の期間中、パウロのもとにコリント教会から派遣されてきた人々がおりました。彼らはパウロにコリント教会の状況を報告するとともに、教会からの手紙を手渡します。そこには、パウロがいなくなった後、教会の中で生じた問題について、いくつかの質問が記されていました。本日の第一の手紙は、そのような教会の中で起きた問題を解決するための勧告や指示、質問に対するパウロの答えを書き記すために書き送られた手紙です。

コリント教会は決して理想的な教会とは言えなかったようです。教会の中には分派や分争がありました。キリスト者としてふさわしくないような生活の乱れや行動、教会としての秩序をめぐる問題がありました。さらに、福音の核心（コア）とも言うべき復活を否定する人が教会の中にいました。しかし、それには理由がありました。そもそもキリストの教会がエルサレムで誕生してから、いまだ20年数年しか経っていません。しかもコリント教会は、ユダヤ教的な伝統をいっさい持たないギリシャの文化や宗教環境の中で育ってきたギリシャ人が、信徒の多数を占める教会でした。そのような異邦人教会で、さまざまな問題が生じることはしかたがなかったと言えきかもしれません。しかし、見方を変えれば、教会の中に問題があるということは、決して嘆くべきことではないのではないのでしょうか。教会が動いているから問題が生じるのです。沼のようにどんよりとして動かない教会は、泥がたまるがあっても、流れはしません。しかし、動いている教会には清流のごとき流れがあり、岩に当たってしぶきを上げ、小石や砂を下へ押し流す力を持っています。パウロは、このようなコリント教会の中で生じた問題と正面から向き合い、時には教会員個人の名前を手紙の中で挙げながら、問題解決のための訓戒や具体的な方策を手紙のなかで書き記しています。いつの時代においても、教会には救いを求める人々が集ってまいります。しかし、救いをとくその聖書の中は、必ずしも耳障りのよい言葉だけが書かれているわけではありません。マルコ福音書に出てくるあの富める青年に言われたように「あなたに足りないものがある」とイエスは言われます。救いを求めるわたしたちすべてに欠けがあり、破れがあります。コリント教会で生じている問題は決して対岸の火事ではありません。わたしたちの信仰生活、教会生活もコリント教会の人たちと同じであります。それを乗り越えるためにも、神の言葉に聞き、キリストに従うことが求められるのです。

では、コリント教会の中に生じていた一番の問題は何だったのか。それは、教会の中に分派が発生していたことです。信徒による派閥ができて、そこで争いや対立が生じていたというのです。この手紙の1章に、それが書かれています。すなわち、教会の中に「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロにつく」「わたしはケファにつく」「いや、わたしはキリストにつく」といった具合に、自分たちが^{ひいき}鼻^{ひいき}にする指導者を旗印にしてこれに賛同するものたちのグループに分かれ、お互いに言い争っていたというのです。コリント教会の中にパウロにつくものがいたことは容易に理解できます。パウロは教会の創設者であり、信仰の何たるかを教会員に教えてくれた初代牧師です。おそらく、多くの信徒たちのあいだで、なおも支持され、親近感を持たれていたでありましよう。次にアポロですが、使徒言行録に初めて登場する人物です。この人はアレクサンドリア生まれで、聖書に精通し、しかも雄弁家でありました。パウロは、アポロほど雄弁ではなかったと思われまます。パウロのほかの手紙を読むと「実際に会ってみると、弱弱しくて、話もつまらない」と言われたとあります。手紙の方が、よほど言葉に力があるというのです。弁舌さわやかなアポロは、パウロより若かったこともあり、それも支持された要因だったかもしれません。3番目の「ケファ」とはペトロのことです。ペトロはコリント教会に腰を落ち着けて伝道した人ではありませんでした。しかし、コリント教会にはユダヤ人の信徒たちも少なからずおりました。彼らの中には、エルサレムでバプテスマを受けて信じる者となり、コリント教会にやってきた人たちもいたことでしょう。エルサレム教会でのペトロは、ヤコブやヨハネと共に教会の柱と言われていた人物で、イエスの第一の弟子であり、その影響力は絶大でした。コリント教会の中に、そのようなペトロを信奉するユダヤ人キリスト者の集団があったことが読み取れます。さらには、以上のような有

力な指導者たちの名前ではなく、「わたしはキリストにつく」と唱えるグループもありました。キリストにつく、という言葉は一見すると人間を見ないで神を見ているという点で、全く問題がないように思われます。しかし、そうではない。彼らは「キリストにつく」というスローガンのもとで指導者を軽んじ、パウロやアポロやケファ（ペトロ）を軽く見ている。指導者を見下げており、つまるところ、自分たちを誇っていた。キリストを自分に従わせていたのであります。これに対して、パウロは「キリストはいくつにも分けられたのか。」「パウロがあなたがたのために十字架につけられたのか」と手紙の中で書きます。キリストの教会で大切なものは何か。それは指導者個人の人間性や影響力ではない。そうではなく、十字架につけられたキリストこそが大事だとパウロは言うのです。

そこで今日の箇所に入ります。本日の3章で、パウロは自分はコリント教会の信徒たちに対して、霊の人に対してではなく、肉の人に対して語るように福音を語ってきたといいます。コリント教会の信徒たちは、信仰生活に入ってまだ4~5年しか経っていない人たちです。霊的な初心者、つまりキリストとの関係では乳飲み子のような人たちだと、パウロは述べます。だから、福音を伝えた当初、あなたがたに乳を飲ませ、固い食物は与えなかったというのです。ところが、その時からもう5年近くたっているのに、あなたがたは相変わらず肉の人だといいます。お互いの間に妬みや争いが絶えないのは、あなたがたが未だ肉の人として歩んでいるからではないか。それを乗り越えて、霊の人になってほしいと願うのです。

ここで私たちは注意しなければなりません。それは、イエス・キリストを信じてバプテスマを受けたからと言って、私たちが肉に属する人間であることをやめてしまうわけではないということです。たしかに、キリスト者となった私たちは罪の体に死に、復活のキリストの命を頂いて新しい生を生きています。しかし、そのような私たちは、今なお肉の思い、肉の誘惑に脅かされています。ゆえに、この肉の思いと戦い続けなければならないのです。パウロは、その事情をローマの信徒への手紙8章で次のように書いています。「神の霊があなたがたのうちに宿っている限り、あなたがたは肉ではなく、霊の支配下にいます」（9節）「肉に従って生きるなら、あなたがたは死にます。しかし、霊によって体の仕事を絶つならば、あなたがたは生きています」（13節）肉体をもって生きている私たちには、絶えず弱さや破れが生じ、罪の誘惑にさらされます。サタンは私たちの足元を掬おうと狙っているのです。油断も隙もあったものではありません。しかし、そのような時、私たちは祈るのです。「神さま、私たちを、肉の思いではなく、キリストの霊によって満たし、正しく導いてください」と。

パウロも同じような誘惑を感じていたに違いありません。二代目の牧師となったアポロ先生ではだめだ。やはり、わたしたちを信仰へと導いてくれた初代のパウロ先生の方がよかった。パウロ先生の方が、指導者としては立派だった、わたしたちは断然パウロ先生を支持する、などという言葉を目にするに鼻高々になり、それを誇らしく思ったかもしれない。しかし、パウロは5節でいうのです。「アポロとは何者か。またパウロとは何者か」「この二人は、あなたがたを信仰に導くために、それぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者です」ここで「あなたがたを信仰に導くために」と訳されている言葉は、原文の主旨から離れています。元のギリシャ語は「それによって、あなたがたが信じるように至った」奉仕者だと書いているのです。ここでの主役は神です。パウロもアポロも、キリストを指し示すための「器」にしかすぎません。ところで、ここで「仕えた者」と訳されている元の言葉は「ディアコノス」です。英語の deacon (=執事) の語源になっている言葉で、「奉仕者」という意味です。つまり、主人が喜ぶように、主人が期待することを最大限行うことが自分の役割だと心得て、それぞれ、神が与えられた賜物を生かし、神のために力を合わせて働く同労者だと言っているのです。それを人間の業に引き下げて、分裂や争いごとにしてはならないとパウロは言うのです。私たちは、自分の名を高くするために教会に集っているわけではありません。そうではなく、神の名をほめたたえるために集っているのです。そこで、本日の説教題の言葉が響きます。「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です」大切なものは、植える者でもなく、水を注ぐ者でもなく、成長させてくださった神であるということです。

キリストにある同労者とは、実は教師や牧師だけに当てはまることではありません。教会を形作るすべての者が、皆キリストにある同労者です。共に賜物を生かして主につかえつつ、キリストの体を立て上げるために働くのです。教会は誰のものでもありません。ただ一人、イエス・キリストこそが教会の頭であります。そのことを覚えつつ、神の畑となってよい実を結ぶものとなり、神の建物をしっかりと建てあげたいと思うのであります。

お祈りいたします。